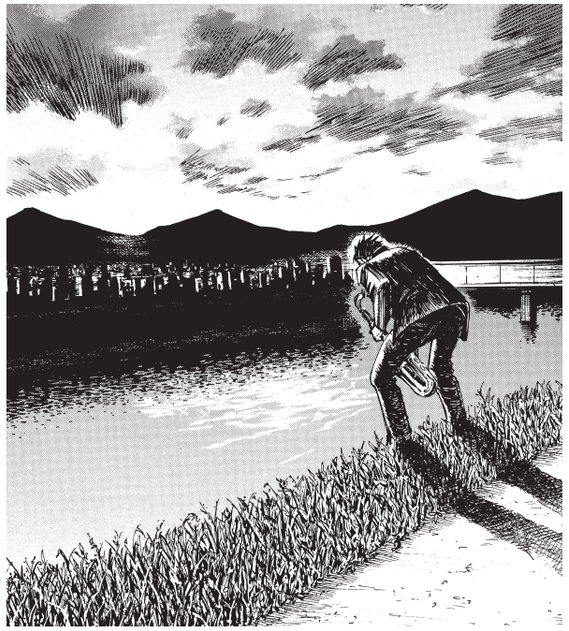

広瀬川の河原で日々サックスの練習に励む宮本 大。
『BLUE GIANT』第1巻より ©石塚真一／小学館

独学の漫画家、独学のサックスプレーヤーを描く

石塚真一（漫画家）

ジャズに没頭し、河原で一人サックスを吹き続ける高校生・宮本 大。
愚直な練習の積み重ねが、唯一無二の演奏に結実し、聴衆を揺さぶる。
そんな独学で邁進する主人公を描く『BLUE GIANT』（小学館）シリーズの
作者自身が、独学で漫画の描き方を習得した。
独学ゆえに獲得した、セオリーに縛られない自由な発想と創作の信条に迫る。

僕は二二歳から二七歳までアメリカに留学していたのですが、その頃は友人に誘われたことをきっかけに始めたロッククライミングに熱中していました。帰国後、IT企業に就職したところ、一年も経たずに会社が倒産してしまい、漫画で勝負したいと思ったのです。こうなったら、やりたいことだけをやろうという思いからでしたが、漫画の描き方など何もわからず、画材屋さんにあった漫画の描き方の入門書を手に取るところからのスタートとなりました。

漫画に教科書はない

なぜ漫画かというと、留学していたとき、浦沢直樹先生の『MASTERキートン』に影響されて、考古学を学びにアメリカまで来ていた同級生の存在があります。漫画に影響されて、人生の選択を変えた人を初めて目の当たりにして、漫画ってすごいんだなと思うようになりました。もともと自分が夢中になっているもののすごさや感動を伝えたい欲求があったので、その手段として漫画を意識するようになったのです。

三〇歳になる手前で漫画家になろうと決めたものの、描き方を教えてくれる人はいません。それでも、画材屋で買った入門書や、浦沢先生と弘兼憲史先生の漫画を参考にすれば、自分でも描けるのではないかと考えました。というのも、両先生の作品は構成が堅固かつ明確なので、ストレスなく読み進められるうえ、解釈しづらい紛らわしさもありません。先生方の作品のページをひたすら模写していくと、「こういう構造になっているのか」とすごくよく理解できるのです。「最初のうちはコマ割りが少ないな」「物語が進むにつれて会話が多くなるんだ」という感じで、構成の基礎やリズムを体得していけた気がします。

不思議なもので、漫画には教科書があるようでないのです。出版社の中で極秘に出回っているのかもしれませんが（笑）、漫画家の先生方にそれぞれの型や流儀はあっても、本当に確立された文法はそれほどないように感じています。だから、描き手は常に自由でなければならないし、変わっていかなければいけません。

時に人に頼ることも

漫画にはネームとよばれる下書きのようなものがあります。僕はそれすら知らないまま描き始めてしまったので、新人賞をいただいた頃、担当者から「来週までにネームをよろしく」と言われて、一週間かけてペンネームを考えてしまったほどでした。山登りにせよジャズにせよ、伝えたいことはいくらでもありましたし、話を作ることはできるのですが、新人賞の受賞から先はたいへんで、それを商品化できるレベルまで引き上げなければなりません。独学は依然続くのですが、幸いにして最初に付いてくださった二人の編集者から多くを教わり、少しずつ力をつけていくことができました。

『BLUE GIANT』シリーズでストーリーディレクターをお願いしているNUMBER 8さんはもともとデビューしたときから担当していただいた編集者ですが、当時も今もダメ出しと修正が入ります。打ち合わせ後にネームを持っていくと、「役者がヘタ」とか「ウソでしょ？」とか、「何してたんですか、今日まで？」とケチョンケチョンに言われて、「ああしてはどうか？」「こうすべきなんじゃ？」と細かく指示をいただく。時には「作家としてもっとしっかり!!」と言われることもありますが、僕は僕でまったくめげないので、お互いにOKなのです。

そういえば、デビュー当時、NUMBER 8さんに「僕の石塚真一という名前は、実はペンネームなんです。石ノ森章太郎先生の〝石〟と手塚治虫先生の〝塚〟に、真実一路から〝真一〟なんですよ」と冗談を言ったことがありました。「え!?」とすごく驚いているので、「ウッソ～ん」と答えたところ、「殺しますよ……」とすごまれました（笑）。

僕は単に独学だけでなく、ちゃんと人に頼り、教えてもらい、修正してもらうことも大事にしています。NUMBER 8さんからすると、「あなたは運がいい。俺にダメ出ししてもらえてよかったね」という言い方になりますが（笑）、お互いに漫画に対して真摯（しんし）でい続けることには違いありません。

現状維持は落ちていくだけ

シリーズの第一部『BLUE GIANT』は、ある日「ジャズにうたれた」仙台の高校生・宮本大が、「世界一のジャズプレーヤーになる」という途方もない志を抱いて、広瀬川のほとりで来る日も来る日も一人サックスを吹き続けるところから始まる物語です。つまり、独学からスタートした人間の物語です。

よく「石塚さんと大は似ていますね」と言われます。たしかに、他の人なら立てないような無謀な目標に愚直に向かっていくところなど、共通項はあると思いますが、大のほうがはるかに真面目です。彼はほんの少しの時間も惜しんでサックスを吹き続けるような人間ですが、僕はとてもそこまでできません。

『BLUE GIANT』の連載を始めるとき、舞台は地方都市がいいなと思っていました。というのは、主人公が自然の中でサックスを吹いている絵を描きたかったからです。ちょうど担当者が仙台出身で、彼が話す仙台弁も今では古いものなのだそうですが（笑）、大のイメージに合いましたので、仙台を舞台に選びました。

ひょっとしたら、地方都市に暮らしているほうが実感できるのかもしれませんが、現状維持

この続きは本誌でどうぞ！